

『暮らしの手帖』にみる高度経済成長期の住生活

梅 原 清 子

The Dwelling Life during the High Economic Growth through the Case of “Kurasinotecho”

Kiyoko UMEHARA

2002年10月15日受理

1 研究目的

昭和戦後期における住生活の歴史について、具体的な生活レベルの記録を掘り起すところから検証する。前報¹⁾では、戦後復興期の住まいの実状と、人びとの生き延びるためのシンプルかつエネルギーな生き様をみた。小論は、引き続き、高度経済成長期における住生活に焦点をあてる。1956年～1973年の18年間である。

2 研究方法

前報に続き、暮らしの手帖社刊『暮らしの手帖』33号から127号（第2世紀27号）までの95冊を分析対象とした。なお、本誌は100号までを第1世紀、以降を第2世紀に区分されるが、ここでは便宜上、通し号数で扱うことにする。なお、号数と西暦年（初頭）を対照しておくと、33号：1956年、53号：1960年、78号：1965年、104号：1970年、である。分析方法は、前報に同じである。

3 結果および考察

(1) 住まい関連項目の分類と量的把握

本誌掲載の住まい関連項目としては、総数602本抽出された。各号に平均すると6.3本である。取り上げられたテーマを分類して図1に掲げた。なお、人々の意識から「戦後」を完全払拭させた出来事と思われる東京オリンピック開催の1964年を区切りとし、前半・後半に分けた。また前報つまり32号以前（1948～55年）のものも比較参照として挙げた。

今回群を抜いて多いのが「商品テスト・買物案内」であり、全体の3割を占める。これに該当する項目は、55年までは数えるほどしかなかった。対して顕著だった、手近な物を利用した小も

の入れづくりのような「ちょっとした工夫」は、今回1割弱と影をひそめ後半の65年以降ではとくに著しい。あまりに些末で冗戯めいた²⁾ 工夫は時代に適合しなくなり、その一方、もの作りの技術は本格的な do it yourself に進んだものと思われる。今回大幅に減少したのは、「設計・計画」、「住様式・住居観」も同様である。つまり、商品テスト風が増え、住宅のプランニングや住まい方のエッセイが減じたのは、依頼・投稿原稿中心から脱皮して「自分たちの手で、実際に研究して、答えを出してゆかねば、どうにもならない」という編集方針の改変が基本にあるが(50号P233)、住まいの中に入り込んでくる商品が急増したこととも無関係ではあるまい。また「環境」の項目が新しく加えられ、ゴミや景観、コミュニティの問題をキーワードにあげることができる。とくに後半部に集中しているのが特徴である。

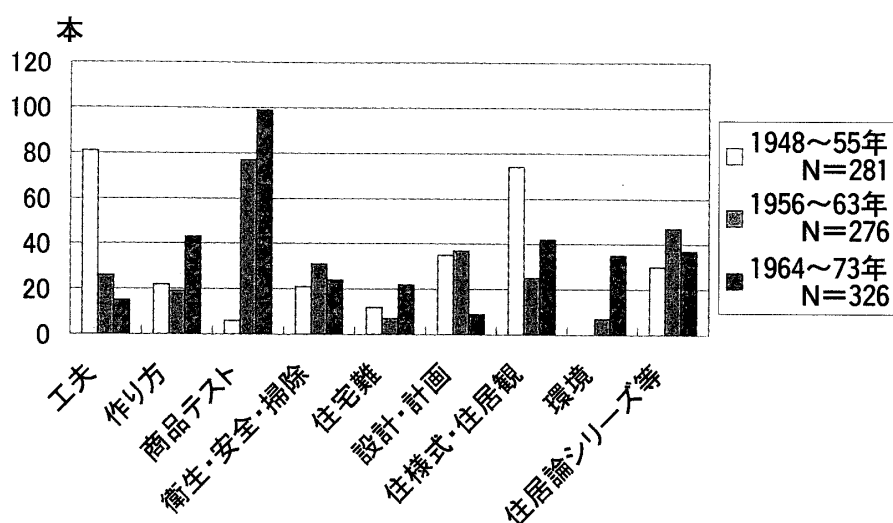


図1 住まい関連記事のテーマ

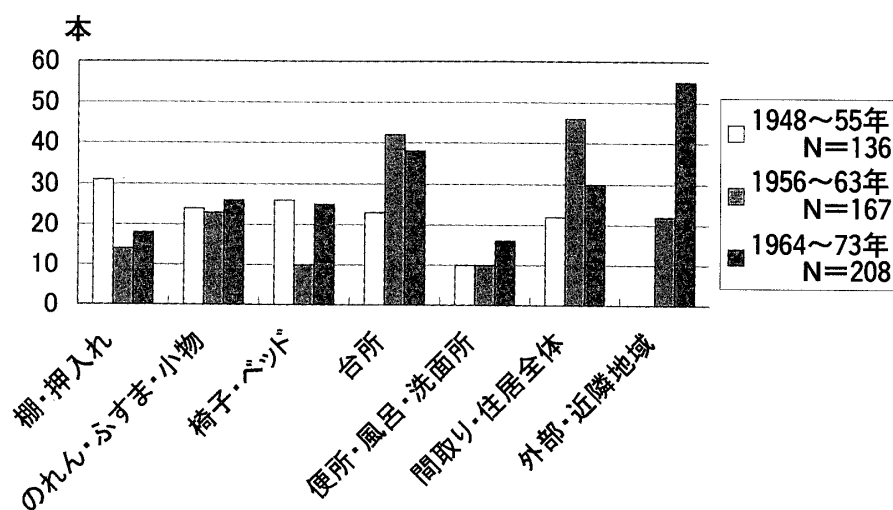


図2 住まい関連記事の対象空間

次に、掲載記事の対象となっている住空間部位について図2に示しておく。ここでは、収納利便をはかる棚・押入れ、室内装飾を中心とする建具・内装材、起居様式に関わる椅子・ベッド、さらに、台所、便所・風呂・洗面所、間取り・住居全体、外部・近隣地域に分類した。前報に倣っているが、外部・近隣は今回新しく加わった。比較的多いのは、台所、間取・住居全体、外部・近隣の3つであり、とくに外部・近隣は後半部の増加が目立っている。

(2) 物の大量導入と「商品テスト」

1953年頃から家庭電化が本格的にスタートする。電気洗濯機、電気掃除機（のち、テレビに替わる）、電気冷蔵庫は3種の神器とよばれ、家電ブームが起こる³⁾⁴⁾。本誌に家電製品が主題として初登場するのは、56年（35号）の電気洗濯機である。まだこの時は、メーカーの説明を参考にしてまとめられた上手なえらび方と使い方Q&A、および使ってみた主婦284名の実態調査である。その後、二槽式（56号）、自動給排水式（71号）と新機能が加わり、その発売された機種は「10年間で7社314種」と数えられる多さである（73号）。本誌の商品テストの態勢も次第に整えられ、各メーカー製品について数次のテストが行われた（60、79、101号）。手入れ修理の仕方（65、73号）や乾燥機を含め全部で14本と、家電製品の中では取り扱いが群を抜いている。本誌は「ミキサーよりも冷蔵庫よりも、まず電気センタク機をお買いなさい」（35号）と記したが、電気洗濯機が生活革新に大きな影響を持っており、いかに世の関心を集めていたか、それだけに度々の改良とモデルチェンジを加えられたかを示すと言える。ちなみに「3種の神器」のうち、電気冷蔵庫は、45号を初回として124号まで全部で8本である。テレビについては、画面の調整（56号）や放送時間（81号）など2、3あるのみで、商品テストは行われた形跡がない。

なおこの他の家電製品もしくは近似製品について、商品案内・商品テスト的扱いの初出をみると、次のようである。

ガス・ストーブ（42号）、電気釜（44号）、トースター（47号）、換気扇（50号）、石油ストーブ（57号）、電気掃除機（58号）、ステレオ（63号）、扇風機（70号）、電気あんか（77号）、電気毛布（82号）、ルームクーラー（95号）、食器洗い機（98号）、ジューサーミキサー（113号）、浄水器（120号）、FF式ガスヒーター（121号）、セントラルヒーティング（127号）等。これをみると、1960年前後に基本的な家電が輩出、さらに70年前後には生活水準の上昇を示す選択的高級志向の製品があらわれたといえよう。

ここで本誌の＜商品テスト＞について触れておく。そのスタンスについては、「消費者のためにあるのではない。生産者にいいものだけを作ってもらうための、もっとも有効な方法なのである」（100号P87）と明言されている。＜かしこい消費者になろう＞ではおそいかかる商品の洪水に、バケツで水をかいだすようなものである、ゆるんだバルブを締めるのが先決だ、というのである。確かに、メーカーがきちんとした品質と性能を備えた製品をつくれば問題はない。一雑誌社ながら、メーカーから商品テストの申し入れを受ける（例えば84号の電気洗濯機、98号の石油ストーブ）など、オーソライズされた検査機関以上の威力を発揮し、商品改良につながった実績もある。ま

たそれに値するよう、細心の注意を払って実験の態勢が整えられた。しかし現実には、花森編集長らの思いとは別に、企業倫理の欠如した事件は後をたたないし、また読者は、本誌を消費生活の手引きとして商品进行评估し使いこなす能力を養ったことであろう (57号P233 等)。

さて、身の回りに電気製品があふれてくると、電気を安全に扱うための知識技術も必要となる。「ヒューズを取りかえるのに一々電気屋さんをたのむのは、ボタン一つつけるのに洋裁店に持っていくくらいコッケイなこと」として、手順を写真で分かりやすく教えている (47号)。同じく「安全／第一」(53号)、「配線器具」(55号)、「ここがわるい」(79号)等が続く。また「どこに・なにを」(43号)では、例えば電気洗濯機は「大ていは風呂場ということになりそう」として錆や漏電の予防法を具体的に示している。電気製品を買うとき、買い換えるとき、その置き場所がなく、少なからぬ混乱を来したのはよく知られるところである。

なお家電ではないが、現代生活にとって必需品化している耐久消費財・乗用車の動向をみておこう。初出は57号「ある日本人の暮し」シリーズにて取材されたものである。60年当時、4万円のはんこつ車ではあるが、「勤務先の市役所で自家用車はひとりだけ」「出勤途中に同僚をひろう」と所有自体がもの珍しく、「家族を乗せて野外パーティー」から「夜飲みに乗り回しいい気分で帰る」まであって、牧歌的ななかにも誇らしげなマイカー賛歌が標される。「定年も自動車でのし」(59号)は定年間際のある男性の視点からドライバーの楽しみを語るとともに、自家用車の家計収支を著している。その頃までは、せいぜい自転車が「一家に一台」(40号)だったのである。その後のモータリゼーションはすさまじく、総務省による「消費動向調査」から乗用車全国普及率を見ると61年が2.8%、オリンピックのあった64年が6.0%であるが、73年には36.7%と、一気に加速していく。60年代後半になると、交通安全とはいえ本末転倒ではないかという「歩道橋」(91号)、無力な駐禁看板「とめてもとまるものなかに」(98号)、遠のくマイホームを高級車に鞍替えした「手近な夢」(125号)、等の記事があらわれ、マイカーの夢が現実になるにつれて車社会の現実が露呈されてくる。

(3) 家事労働を合理化する台所改善

戦後家庭の民主化、生活改善の流れの中で、台所の近代化は大きな課題でありかつ功績を残したことは知られている。それは前報でも見たように、50年代前半から萌芽的に始まっていたが、本格的に開花するのは今期であろう。前述したように台所関連記事は多数見られる。家電機器の多くが調理・厨房用であり、電気冷蔵庫、炊飯器、食器洗い機等のほか、爾後ほとんど普及をみなかった魚焼き器、温蔵庫もある。ガステーブル、石油コンロ、オーブン(テンピ)、ガス湯沸かし器、浄水器等、コンロ周り・水周りでも設備の多様化がうかがえる。食器洗い洗剤、ナイロンたわし、ポリバケツが登場したのもこの頃である。

食器洗い機については、本誌は厳しい姿勢を崩さない。「愚劣な食器洗い機—主婦を甘く見てはいけない」(98号)において、汚れが落ちにくいという基本的欠陥をつき、以後99、102、104号と集中的に扱い、「当分あきらめるより仕方ない」(104号)と断じている。汚れが残り落ちにくい、

形の複雑な和食器を洗い槽に収めるのは「ジグソーパズルなみ」、手洗いしたほうが早くて簡単、という。本誌のこの酷評が決定づけとなって、以来、家電メーカーは一部を除き商品化に敬遠気味だった⁵⁾。近年になって、システムキッチンの普及や省力化の徹底により、食器洗い機が気を吐いているが（とはいえ普及率はようやく10%）、本誌の指摘した基本的な性能条件のほうはクリア出来たのであろうか？

ところで、25号から始まったKITCHENのシリーズは連載を重ね、必要な広さ、設備配列、食卓との関連、改善予算等など、図解や実例写真を豊富に紹介しながら、懇切に説明されており、読者は台所改善意欲を醸成されるところが大だったと思われる。例えば、間借り生活の単身者向けの「デスクキッチン」(33号)のように畳敷きの室内にベニヤ板を貼り、古机を置いてキッチンスペースを編み出した粒々辛苦の作もある。出来るところで工夫を施し少しでも暮しよく、との本誌の基本姿勢がうかがえる。このようなものから、現代のシステムキッチンと見まごうばかりの先進事例まで、多種多様なキッチンの紹介がある。34号では「リビング・キッチン、ダイニング・キッチン」を主婦の労力軽減の視点から、また家族の協力の点から推奨し、36号では台所の設備や内装を替え水道やガスを引くのにかかるか、改造費用の試算をしている。それによると、流しの材料には「値段はやすいがはりかえて1年ぐらいたつと漏りはじめる」トタン張り、「丈夫だが皿など割れやすい」人造石研出し（ジントギ）やタイル貼り、陶器製、「高価だが使いやすい」アルミニウム張りやステンレス張り、という具合に多種類が並行して流通していた。さらに、台所の必要な広さを設備寸法や配置、器具数から割り出し（38、39、40号）、カウンター型食卓やハッチなど含む先進事例の紹介（41、42、49号）と台所診断&リフォーム（43、45、46号）に続く。

台所診断の一つに、日本住宅公団（現・都市基盤整備公団）のアパートの台所の例をあげ、問題点を指摘し解決策の提案までおこなった（48号）。ユニットの流し中心配置の動線、天袋戸棚位置、ガス台高さ及び窓隣接、ガスコックの位置等など、具体的に使いにくさを実証してみせた。いわば公団アパートの台所という「商品」のテストである。これに対し公団側からは、迅速に弁明がなされている（49号）。すなわち本城和彦設計課長が、流し配置や面一ガス台高とした理由などを説明したうえで、ステンレス流しについては公団がプレス加工に成功して、大量生産によりコストダウンが可能となり、さらに「ヨビ水になって」一般住宅にも広く使われ始めた、と自負が述べられている。

また、ユニークさを誇る本誌の面目躍如たるところであるが、批判だけにとどまらず、台所設備の研究を総結集して流しの商品開発まで行った（69号）。「使いやすく、質がよくて、値段の安い、ステンレス製」をめざして暮らしの手帖研究室が3年間をかけ、ナス・ステンレス等メーカー3社と共同して製品化したのは、間口170cm、流し・調理台・ガス台まで継目なしの1枚の天板、当時としては破格の2万円弱である。流し下のキャビネットを付けずに、コストダウンと高さ調整を可能にし、シンクの深さや火口の位置にも人間工学的に使いやすさを追求した。これは、シルバークインの名で63年に売り出された(70号)。時期尚早からか売れ行きは思ったほどではな

かったといわれるが⁶⁾、シンプルでありながら神経の行き届いた、システムキッチンの原点をみるようで、興味深い。なお、最新の2002年版『別冊暮らしの手帖』には、全国で今も現役で使われる「40歳のシルバークイン」の取材記事が載せられている。いまだきこの長寿ぶりは、それに値する本当に上質のものだったことと、使い手の慈しみのゆえというほかない。

(4) 室内気候を快適にする設備機器

日本の住まいは木造家屋の構造材料の特性から従来冷房はもとより暖房も不向きとされる。事実前報においても「暖かく・涼しい住み方」をテーマにしたものは僅かであった。今回も、図1の〈衛生・安全・掃除〉のテーマから室内気候のキーワードのみ取り出すと、8本にすぎない。ここに〈商品テスト〉のなかから室内気候調整設備機器に関わる記事を加え、36本について見た。それによると、冬季暖かく住もうための記事が28本（うち設備機器が22本）であり、夏季の防暑対応記事よりずっと多い。当時、石油ストーブは61年8%から67年には53%と爆発的普及をみせているが、クーラーの普及までは間遠なのである。また往時から日本の住まいは「夏を旨とする」作りようになっており、その意味では夏の涼しさよりも冬の寒さを凌ぐ方が身近で関心があったかもしれない。室内気候調整設備でいえば、扇風機やルームクーラーという涼を得る機器以上にストーブ、アンカ、セントラルヒーティングなど取り扱われている。ただし扇風機は、「電気扇」「涼風器」⁷⁾とも呼ばれて明治の頃から出回る、わが国でもっとも古くからある家電製品のひとつである。

住まい本体を防寒的構造にする方法としては、「オンドルのある家」や「マホー瓶のような家」が紹介されている（33号）。前者は、大都会札幌でも数えるほどしかないというオンドルをつけた公庫融資住宅、後者は、二重窓や断熱材（当時はオガクズや、石炭ガラを固めたアッシュ煉瓦）を用いた北海道工業試験所の実験住宅である。対象が北海道という寒冷の地であることから推しても、断熱構造は当時の日本で例外的であることがわかる。今日の住まいでは「高断熱・高気密」がクローズ・アップされ、ようやくその技術が普及しつつあるが、当時はストーブを主とする手軽な暖房機器に依拠するほかなかったのである。また、ストーブについては、東京消防庁との論争が世間の注目を浴びた点は特記される。本誌は、「石油ストーブの出火はバケツの水で消せる」ことを実証してみせたのである（93・94号）。科学的常識とされていることに対して、暮らしの感覚から挑戦した代表的な例である⁸⁾。

この他冷暖房の範疇ではないが、換気扇情報が繰り返しあらわれる。前述の実験住宅「マホー瓶のような家」ではレンジ上部に換気扇が設置され、価格は6,500円だが煙や臭いをなくすには贅沢ではない、と付されている。商品案内の初出では、「台所を工場にたとえれば、換気扇はその煙突」（50号）として、台所の清浄にとって換気がいかに重要であるか、強調されている。換気扇の効果的な取り付け位置について実験的に検証したうえで、実際にはいい加減な取り付け方がなされていることが多いと建築家の不勉強を指摘している。公団住宅でも、当時プロペラ式小型換気扇を研究開発したにもかかわらず、予算的制約から器具は居住者負担の時期が続いた、という経

緯がある。裏を返せば、日本の住まいでは、換気概念理解すらおぼつかない時代ではなかったか。炊事作業による煙や熱を屋外に排出するのは、開口部を通じての自然換気がごく普通のことであり、一般の住宅に換気扇が設置されるのはおそらく、住まいの気密性が高まる、もっと後のことである。

このように、遅速はあるが、室内気候を設備機器によって調整し、快適化する動きが進行していく。

(5) 洋風化を具現する家具・インテリア

洋風化を推進する傾向が強い本誌であるが(前報)、インテリア要素について和洋の構成を検討してみた。

表1 住まいの洋風化の事例

号数	タイトル	食事室型、(床仕上げ材)	居間用の椅子類	主寝室	子ども室	室数(うち和室)
33	オンドルのある家	LD、(リノタイル)	なし	和室	—	6(4)
33	マホー瓶のような家を	LD、(フローリング)	応接机椅子	和室	2段ベッド	3(1)
39	私の建てた家	LD、(不明)	押入れベッド	和室	—	5(3)
40	主婦を中心に考えて	LD、(板張り)	デッキチェア	ベッド2	畳ベッド作り付	5(1)
43	6帖一間で夫婦ふたり	ワンルーム(板、じゅうたん)	なし	ダブルベッド	—	1(0)
43	10坪の公営住宅に夫婦と子ども2人	D、(板張り)	畳、コタツ	ダブルベッド2段ベッド、親居	3(1)	
43	9坪の家に親子5人	LD、(フローリング)	なし	ベッド2	2段ベッド、親居	3(0)
47	決心がさき、お金はあと	LD、(フローリング)	作り付ベンチ	和室	—	3(2)
53	台所改造始末記	LK、(リノタイル)	なし	和室	2段ベッド	5(2)
58	母屋につづけて建てた若夫婦の家	茶の間、(畳)	掘りコタツ	和室	—	3(0.5)
64	22坪の住い	DK、(縁甲板)	応接机椅子	ダブルベッド	—	5(1)
70	素人が120万円で作ったブロックの家	LK、(ビニレザー、じゅうたん)	ソファ	ダブルベッド2段ベッド	—	4(0)未完成
72	35坪の土地に25坪の家を建てる	LK、(フローリング)	なし	和室	ベッド、3人個室	7(2)
79	プレファブのすまい	DK、(フローリング)	じゅうたん、和卓	和室	洋室に布団	5(1)
92	東京の屋根の上で	LK、(フローリング)	作り付ベンチ、椅子	ベッド2	—	4(1)
115	白く明るい家	D、(フローリング、じゅうたん)	応接机椅子	ダブルベッド2段ベッド	—	9(2)
119	スウェーデンからきたプレファブ住宅	LD、(じゅうたん)	L型ソファ	ベッド	ベッド	5(1増)

まずグラビア写真より採取された、自らの住まいや住まい方を開示した17例を対象に表1にまとめた。ここからわかるように、畳に坐って食事するのは僅かに1例のみであり、食事の椅子座化が顕著である。台所・食事室・居間の関係に注目すると、台所兼食事室のDK型が2例、食事室と居間が兼用のLD型8例、3者一体化したLK型5例、それぞれ別れた独立D型2例である。LD型が多いのは従来の茶の間の伝統に拠るかも知れない。また独立した居間のある例が4と少ないのは住宅規模の制約のせいでもあろう。これらに置かれる椅子類をみると、ダイニングセットは別として、他に何もなしか、あっても簡易なものでソファセットのような重厚かつ形式的なものはない。洋家具の流通が十分でないことを推測させる。夫妻就寝についてはベッド9例、布団8例と和洋半ばし、上述の食事空間に比して椅子座は少ない。椅子座の場合は、狭小であろうとは非でも、という感じで、6帖一間暮らしの夫妻は、「前に胸を患ったのでゼイタクなベッドに」して、ダブルベッドを押入れに押し込んで使用する。5帖の部屋に5つのベッド(2つは二段式)

の住まいすらある(ともに43号)。さらに子どもの就寝については、子どものいない非該当例を除いた10例のうち9例までがベッドを用い(うち2例は両親のベッドと同室)、残る1例は洋室の板床に直に布団を敷くというスタイルである。子ども用のベッドは2段ベッドが目立っている。さらに間取りの和洋別室構成をみると、その比は平均3対7となり、洋室が断然優勢である。「若いのに」椅子座にしなかった、例外的1例の夫妻は、和室の多用性と生まれてくる子どもの安全をメリットに、また家具がおけるほど広くない、を理由にあげている。

洋室といえば椅子やベッドの置かれた部屋をイメージするが、本誌ではこれらの洋家具が頻出する。その扱いは、商品情報としてだけでなく、読者による手作り家具の対象として(42・90・110号)や椅子カバーなどの付属品作り(62・70号)の工作や、ベッドメイキングの仕方(92号)などであり、これらの家具類が生活の中にしだいに根付きつつあることをうかがわせる。とくに子どもの2段ベッドの人気は、表2にも明らかだったが、かなりのものである。これは子どもの住空間の洋風化推進役を果たしたと考えられる。「二段ベッドははたしていいものだろうか:88軒の証言」(112号)によれば、ベッドの生活にあこがれて、布団の上げ下ろしの手間がない、昼寝でも何時でも寝られる、等と評価され、畳の生活とは基本において異質なものと受け取めている人が多い。また「自分のことは自分でやるようにこどもの場所を確保するってことで」、蛍光灯つけて読書する、ステレオやらオルガンすら置いて「代用子ども部屋」となっている例もある。ただし、2段ベッドは「1人分のスペースで2人寝られる」と使い始めたものの、昼間は「場所をとるし、もう、うっとうし」という。狭さ対策でありながら、狭さを再生産する要因になっている。聞き取りの対象となった公団タイプのアパートという居住レベルでは、ぎりぎりの自家撞着的家具と言えよう。

「3Kのアパートに4点セットを入れたらなにが起ったか」(98号)は、公団住宅に入居した若い夫妻の家具泣き笑い話である。「ちゃぶ台じゃなくイス式に」「少しせまいけどリビングセットを」とデパート廻りの末、手に入れた「夢」だったが、忽ちに増える物の数々、さらに子どもが生まれ走り回るようになれば、夢の家具は弟の新家庭への払い下げ、残りは部屋の隅に積み重ね置く(倒れないよう紐で縛って)、が結末である。

カーテンも、洋風インテリアの代表格であろう。生地・色柄の選び方(45・59号)、吊り方・縫い方(65・92・12号)、さらにその防寒効果、遮光性(52・95号)についてもレクチャーがなされる。その他じゅうたんについても同様である(92・87号)。

また床や内壁など内装仕上げ材に関する記事は、板の間用ワックス(40号)、壁紙選び(16号)などがあるが、家具・カーテンに比べると少数である。これは、従来の畳の和室に洋家具を持ち込む式の「和洋折衷」が、当初先行したことをうかがわせるものであろう。何分、内装を改めるよりも、椅子やベッド、カーテンをとりあえず導入する方が容易いのは察しがつく。ただし、ペンキ塗りの記事は5本と多い。「あなたの住まいにも、もっとペンキを」(46号)と、繰り返し登場する。「木材の木の美しさを見せるなどという、ぜいたくは言っていられない時代」バタ臭い

ペンキが、do it yourself の本誌のスタンスにもマッチするのであろう。

(6) 依然として続く住宅難

表2に住宅難の事例を一覧してみた。暮らしの概要がわかるものを選び、手記等により自らの住宅困窮を訴えた例に加え、当時の厳しい住宅事情を読み取ることのできる記事をカバーするよう

表2 住宅（借家）困窮の事例

号数	タイトル	住宅種別	住宅規模	家賃円(収入比)	家族人数(構成)
43	6帖一間で夫婦ふたり	間借木造	6、K2 *	1,200(?)	2(夫妻)
43	9坪の家に親子5人	公営木造	約13、5、3、K2	750(?)	5(夫妻、子12~9才)
55	やっとなのおもいで自分の家を	民借木造	6、K1	3,500(22%)	3(夫妻、子3才)
86	狭いながらも狭いわが家	公団RC	6、4.5、DK5.5	7,000(?)	4(夫妻、子高3、中3男)
88	ただいま8人6帖と4帖半で生きています	間借木造	6、4.5、K1.5	不明	8(夫妻、老母、子中2~2才)
100	1. トイレの戸にもたれて食事する	民借木造	6、3、DK3	18,000(40%)	4(夫妻、子6、4才)
	2. つらくても泣く場所さえない	民借木造	6、4.5、K3	22,000(35%)	4(夫妻、老母、子2才)
	3. 足がつかえないところで寝たい	公団RC	2DK	6,900(9%)	4(夫妻、子8、1才)
	4. 親が泊まれば家具を大家に預けて	民借木造	6、K2	10,000(17%)	3(夫妻、子2才)
	5. 家を四角に掃いて掃除がしたい	公団RC	2DK	5,500(7%)	4(夫妻、子8、6才)
	6. 扇風機しまえば暖房器出てくる	民借木造	6、4.5、K1.5	14,000(19%)	4(夫妻、子7、4才)
	7. 寝るたびにコタツの脚を外す	民借木造	4.5、K1.5	7,500(15%)	3(夫妻、子0才)
	8. 三人目が生まれるならでくれ	民借木造	6、DK4.5	18,000(26%)	5(夫妻、子6、3、1才)
	9. 子供に居留守を使うなさけなさ	公団TH	6、4.5、3、K	6,500(9%)	4(夫妻、老母、子2才)
	10. ふすま一枚となりに母親が寝て	公団RC	6、4.5、DK	9,300(18%)	4(夫妻、老母、子2才)
	11. 先生こんどの部屋は便所つきよ	民借木造	6、4.5、K2	18,000(45%)	5(母、祖母、子16~11才)
	12. 二階では気がね階下は気づかれ	民借木造	6、3、K3	11,000(22%)	3(夫妻、子1才)
	13. 狭さゆえに親子ゲンカ夫婦喧嘩	公社	2K	4,700(10%)	4(夫妻、子20、18才男女)

* 数字は帖数をあらわす
K2は2帖広さの台所を意味

にした。まず、民間の場合はすべて木造で、いわゆるモクチン一辺倒だったことがわかる。モクチンは、急増する都市人口の受け皿として、雨後の竹の子のように建設された零細アパートである。面積、設備、環境ともに低質であり、この大量存在が都市の居住水準を低下せしめる元凶となっていた⁹⁾。表でもわかるように、間取りは1K、2Kが多く、広くて2DKである。家賃負担については、収入の4割という途方もないものもあり、公民間の格差も一見して明らかである。公団・公社の場合は家賃だけでなく設備が整いモダンなイメージがあり、激しい応募競争をくぐって入居したときの喜びは、口を揃えて語られているが、じきに狭さへの不満が生じ、その点では民間と変わるところがない。さらに、タイトルを見るだけでまさに実態が伝わる、そのままペーソスにみちた川柳として通用しそうな、一般の人々の住生活が赤裸々に描き出されている。「寝てもアザやコブの出来る」、「物はのせたりぶらさげたり、天井裏に投げ入れたり」、「夜具をしくときには椅子やストーブを玄関に出し…玄関の板の間は埋まってトイレに行くのがまた大変」

等もある。足の踏み場もないというのが決して譬えではない、狭さゆえの過密居住のすさまじいまでの現実。風呂場の1.5帖スペースがもったいなくて物置に改造した例もあるぐらいで、物は買うまいと思うけれど、これだけの家族にはやはり必要、と居住者は嘆息する。さらに「物理的狭さもさりながら」、子どもの泣き声に身をすくめ、夫婦生活もままならない。プライバシーを保ちようのない家族の軋轢に、心身ともに萎縮して暮らす。

以上は借家の場合であるが、持ち家として決して安穩とできる訳ではない。マイホームを手中にするには、まず資金調達の苦労がある。現在のように住宅ローン制度が整備されてはいない時代である。例えば、47号「決心がさき、お金はあと」の主人公は、月給3万円の公務員であるが、総額78万円で土地を買い家を建てた。自己資金14万、残りは住宅金融公庫から30万、勤務先共済から10万、親戚から24万円の借入である。55号「やっとなのおもいでじぶんの家を」は、平均月給2万4千円、取得費は95万円である。自己資金8万、簡易保険から5万がおり、あと公庫から47万、労金から15万、親戚から20万円が借金である。詐欺まがいの奇策を講じた資金繰りを重ね、ようよう支払う。また苦労は、資金繰りだけではない。土地探しに足を棒にして歩き回り、公庫との交渉や登記手続きは、業者任せにせず自ら足を運ぶ。手数料を節約できると思えばこそ。図面も何十回も書き直す。粘り強さと体力を必要とする、まさに戦いである。こんな思いをして建てた家は、「3帖の夫妻寝室」であったりするから、今から思うといじらしいほどの慎ましさかである。それにしても、当時の住宅金融公庫制度の果たした役割—個人住宅貸付に低利で開放することで持ち家政策を担った、その影響の大きさを再認識させられる。

早川は『住宅貧乏物語』¹⁰⁾で住宅の貧困な諸現象を丹念にひろい集め、日本人の生活と文化に及ぼす問題を整理して、住宅政策の課題として提示した。本誌編集長の花森も、「1平方メートルの土地さえも」(117号)において、国の土地・住宅政策を批判する。地価高騰にも手を打たなかった政府、見ているだけの野党、あきらめかけているばかり、でもあきらめることはない、「国民」の名に値する「住む権利」を保障せよ、それが政治ということではないか、と。

63年第1次、68年には第2次マンションブームが到来する。戦後、マンション(RC造分譲集合住宅)が東京で初めて登場するのは56年であるが、当時は、高級志向であり、建設戸数も5年間で僅かに1200戸余に過ぎなかった。68年第2次ブームは、簡素化によるコストダウンに加え、戸建住宅の高騰とローンの普及によって、加速された¹¹⁾。このマンションブームは、住宅難・住宅困窮に個人的に対処しうる方策であるとともに、膨大な住宅需要をみこんだ住宅産業の進出が背景にある。本誌でも60年代後半になるとマンションの文字が見られ始め、72年(119号)には「これぞマンション」と題して、本誌編集部が100戸(59棟)の主婦から協力を得ておこなった調査結果が掲載されている。地域の特記はないが都内とその周辺と思われる。各戸について購入価格、住戸規模、室規模、台所設備等の実態や居住者意識について調べたものである。平均価格は710万円(1千万円以下を母集団とした)、平均規模64m²となり、当時としてはごく平均的なものといえる。また購入時期は68年が8割を占める。従来のように畳数や部屋数で住宅規模を表すことの弊

害、狭すぎて不便を強いられる浴室・便所・玄関、さらに台所分の広さしかない「DK」、等の住まいの実態が明らかにされている。居住者の不満をみても、やはり「せまい」が群を抜き（79人）、次いで換気のわるさを52人があげている。集合住宅に顕著と思われる騒音や近隣苦情も3、4割の人があげている。水漏れや壁のはがれなど、明らかに欠陥住宅と思える例も少なからず見受けられる。コンクリート造集合住宅という殆ど不知の住宅様式に、居住者の住まい方が対応しきれないという面もあるだろうが、ここでは「見かけだけはさも立派そうに見えて、その実は、最低の基準にもおよばないものを、言葉だけマンションとかシャトーとか、さも高級そうな名前で」まさに売らんかなのマンション業者と、その根底にある国の住宅政策の無策を批判している。

政府の住宅・土地政策にたいしては、「見て見ぬふりを政府は」（109号）で作家の中村武志氏も怒りを顕わにしている。しかし一方で、氏が会長をつとめる東京間借人協会がこの年主催した「住宅よこせデモ」の参加者は僅かに250人という現実をあげ、都内に存在する住宅難世帯「80万人」を引きあいに、住宅問題への国民自身の姿勢に対して疑問が吐露されている。

(7) 環境への問題意識

70年代、水俣をはじめ全国で公害反対の住民運動が燃え上がり、1972年にはストックホルムで国連人間環境会議が開かれるなど、環境問題への国際的関心が高まってきた。

「みなさん物をたいせつに」（116号）で花森は使い捨て社会を真正面から批判した。政治家や企業家の言いなりになって、「ほくら つかうかとかと…買っては捨てていた」「捨てていたのは、物のつもりだった」しかし「捨てていたのはじつはここらだった」と。さらに「愚かなりわが買物」（123号）では、ゴミのあふれかえる東京のまちを眺め、食べ物を腐らしゴミを増やす冷蔵庫と、食べ物を腐らせなかった母の知恵を見比べ、いらぬものを押し売りするスーパー商法や、ゴミ集積場の「“ベカラズ” 看板写真コレクション」を挙げている。これらにおいて、廃棄の現状から、消費や流通・生産のあり方まで見直すことを企図している。企業の社会的責任や政治の倫理を問うと同時に、私たち一人ひとりのライフスタイルを問題にしようとしているのである。

資源・ゴミ問題の社会的拡大、あるいはこのような誌上キャンペーンに対して、一般読者の側は少なくとも住生活の面では、敏感に呼応しているとはいえない。投稿記事には家電製品の修理不能に憤るものやヨーロッパの環境先進国の事例について紹介記事が3、4みられるのみである。むしろ「節約アレルギー」（126号）のように、自分が電気も水も無駄遣いをしないのは生活習慣からであって、公然と節約が叫ばれそれに協力するのでは、戦争中の苦い思いと重なって複雑な胸中になる、との醒めた意見もある。本誌読者層のライフスタイルとして肯けるところではある。もっとも前述したように、住宅内の物の多さには辟易とし、そのことが住宅の狭さを再生産する事実も実感されている。しかし大量消費を廃棄・環境問題として認識するまでは至っていないように思われる。

環境意識で比較的多いのが、街の景観に関する事柄である。窓窓にはためく洗濯物、不調和な屋根の色が町並みを醜悪にしていること（ともに92号）、外国では美観を守るためにきびしく規制

を受けることが多いが、日本ではそのようなことには殆ど意を払われぬのである (115・125号)。また「夕日を失った」(110号)では、都心郊外をとわず建物が林立し、壮大な自然のフィナーレを眺めることもいつの間にか出来なくなった。このような形で、身近な自然が次つぎ失われていく。

また、近所付き合いに関する記事が、読者の投稿に散見される。暮しのなかの騒音問題「どうぞお静かに」(74号)がルポ記事で掲載されその連鎖反応もあるだろうが、近隣騒音への悩みもあらわれる。早朝から子どもをあやす団地の奥さんの独り善がりな声へ苛立ち (76号)、隣家の犬の鳴き声に「頭がキーンとなって、犬よりも飼主の方がにくらしく」なる (77号)。また、建築中の近所迷惑も「一言挨拶があったら、こんなに心は波立たなかった」(78号)や、積雪の朝どの家も玄関先を除雪しないので難渋する郵便配達夫 (123号)は、昔はごくあたりまえだった習慣をなくしたことを嘆く。インターホンの普及で「見えない奥さん」になって注文とりが至極やりづらくなった、と嘆く酒屋さん (81号)もいる。どこにでもありそうな近隣関係の「愚痴」ではある。それがこのように活字になってマスコミに登場しはじめたこと自体、都市化による人間関係の希薄化を見て取れよう。松田道雄は、団地生活は旧弊から解放されはしたが孤独な主婦を大量につくりだし、それを『暮しの手帖』は強化したのではないか、以前なら井戸端に集まってあれこれ評定したものを、情報が正確に瞬時に伝わることで孤独を増長しはしないか、と危惧を述べる (77号)。メディアの発達もまた、都市に暮らす人々の分断と孤立を深める側面をもつ。その一方、都会では隣人とは話さないというタブーがあるようだが、それは自分たち個々の問題ではないかと問う「不思議なタブー」(116号)のような意見もある。見知らぬ人でも話かけると返ってくるものは大きく、人と触れ合うことは「とにかく楽しいから」と素朴に語られる。また、来客習慣なども、本誌に見るところまだ残されていた。ただそれは、夜間に来客があると家族がつきあって起きていなくてはならず、幼い子どもがかわいそう、といった類である (55・39・100号)。これは、ひとえに家が狭く部屋数が限られていることに起因する。他家の迷惑を顧みるマナーもなかったのだろうが、「家が狭い」は人の付き合いを次第に規制していく要因になったことが、推測できる。

4 結語

1956年『経済白書』は「もはや“戦後”ではない」と宣言し、この時期から73年のオイルショックまで、日本経済は高度成長を続け、物の豊かさを国を挙げて求めてきた。

住まいの中には生活革新の名の下、新しい家電製品や家具、生活用品の大小さまざまな物が導入され、同時にそれらの物は住生活を大きく変えていった。それは、これまで経験したことのない夢の生活が現実のものとなる近代化の過程でもあった。

家事労働合理化の観点から台所の改善が、買う人・使う人の身になって追求された。新しい調理用・厨房内機器の導入によって、また台所空間の配列や素材・形状のプランニングによって進

められた。また、ガス・石油ストーブ、後にはルームクーラーなど設備機器の普及によって、室内気候の人工調整が可能になり、快適な室内をつくり出した。DKやLDが採用され、起居様式の椅子座が豊かさの象徴として浸透し、食事にはダイニングセット、子どもには2段ベッドが普及した。椅子座とするためには一定の広さを必要とするが、空間の大小にかかわらず指向が大勢といえる。効率的で快適な生活は、これら数々の家電製品や洋式家具、そしてマイカーによって達成されたかのようである。

しかしそれらの入れ物であり生活の場である住まいは、低水準なままで残されている。そればかりか、物の大量保持によって住空間の狭さはいっそう増幅される。この時期の住宅事情の厳しさは、敗戦直後の住宅不足が十分解消されぬまま、高度経済成長による人口の大都市集中によってもたらされたものであり、過密居住、家賃・地価の高騰、居住環境の悪化が顕著な、いわゆる慢性的な質的住宅難の状況である。公共住宅の供給はその需要に見合うものではなく、膨大な住宅需要をまかなうのに、零細な木造民間借家が、さらに住宅産業によるマンションが増大した。このような中で、都市に暮すようになった人びとは、住宅政策の不十分な現状では、戦後の復興期がそうであったように自分で何とかするほかはないと、個人的な居住水準改善の苦労と努力にひたすら、果敢に、エネルギーを費やし続ける。その一方で、近隣生活の慣習や伝統が失われ、人間関係の弱体化が顕在しつつある。資源・ゴミ問題についても、大量消費・使い捨てのライフスタイルとからめて警鐘が鳴らされ始めている。

急激な都市化が押し寄せ、物のない窮乏生活から、有り余る物に腐心する生活へ駆け抜けていった18年間であったといえる。

引用・参考文献

- 1) 拙稿『『暮らしの手帖』の事例からみた戦後の住生活』和歌山大学教育学部紀要（教育科学）第51集、2001、PP113-124
- 2) 同上 P119
- 3) 日本生活学会『生活学事典』TBSブリタニカ、1999、P453
- 4) 日本家政学会『日本人の生活』建帛社、1998、P82
- 5) 朝日新聞学芸部『台所から戦後が見える』朝日新聞社、1995、P127
- 6) 同上 P40
- 7) 林丈二『型録・ちょっと昔の生活雑貨』晶文社、1998、P136
- 8) 唐澤平吉『花森安治の編集室』晶文社、1997、P99
- 9) 塩田丸男『住まいの戦後史』サイマル出版会、1975、P192
- 10) 早川和男『住宅貧乏物語』岩波書店、1979
- 11) 本間義人『産業の昭和社會史 5 住宅』日本経済評論社、1987、P198